慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	マルクスの人性論
Sub Title	
Author	平井, 新
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1946
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.39, No.4 (1946. 10) ,p.249(11)- 272(34)
JaLC DOI	10.14991/001.19461001-0011
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19461001-0011

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

法則の體系の構成と云ふ形態をとり來つたのである。かゝる觀點に於いて經營法則が具體的に如何に體系付けられるかの問題が直ちに生じ來るのであるが、これに關しては、個別經濟に於ける經營活動と社會經濟の運營との關係を一層具體的に分析することを要する。我々はこの點を別に論及したいと思ふ（註六）。

（註一）近刊拙著「經營經濟學第二部企業財務論」第二節參照。

（註二）石原純博士「自然現象の比喩より見たる統制經濟の諸問題」東洋經濟新報一八三六號三頁以下、尙ほ博士の所論に對する論評については村本福松教授著「經營經濟學概論」三一五頁參照。

（註三）杉村廣藏著「經濟哲學正論」三一五頁。

（註四）北川教授論文「經勞」第五册四七頁

（註五）Schönpflug "Methodenproblem der Einzelwirtschaftlehre" 第一章參照

（註六）近刊拙著「經營經濟學序說」第十章參照

マルクスの人性論

平井新

一

社會主義の求むる基本價値は「最大多數の最大幸福」にあつて、少くとも此の點ではエルベシュース、ベンサム等の所謂功利主義の目指す所と相撰ぶ所はないばかりか、事實は前者が後者の所說を踏襲したのである。かゝる幸福の實現を妨げてゐるものは一體何であるかと云へば、社會主義はその根本原因を人間自體の性向の裡に求めないで、專ら社會環境の中に見出すと共に、その變革の鍵を現存の財產制度に求める。この點は殆ど總ての社會主義者が異口同音に唱へる所であつて別段異論のない所である。人間の性向よりも社會環境の勢力を重視するところから、社會主義の一切の實踐的努力は生れる。この點に問題はない。しかし乍ら、人間の性向は先天的、遺傳的のものであるか、後天的、即ち社會環境の產物であるか、又人性は生來善であるか、惡であるかといふ問題になると、

社會主義者の間に於ても必ずしも一致した見解はないように思はれる。元來、社會主義者は社會改造に急なる餘り、人類の不幸を無差別に社會環境の責に歸して、人生の究明を怠り、その認識に缺くる嫌ひが少くないようである。社會環境の勢力を偏重視することも、所詮は人性に對する一定の判斷を含むものであつて見れば、人性の認識は寧ろ社會改造理論の先決問題と言はなくてはならぬ。こゝでは專らマルクスの場合を考へて見たい。

人性に關して、一般に代表的學說と目せられてゐるものは（一）遺傳說（二）環境說の二つである。

遺傳說は人間の性向が、根本的に、遺傳せられた本能や性癖や能力や感情の總計であると主張する。人間は生れる時、既に種々の組合せ、色々な色彩や烈度をもつた特色を備へてゐる。そしてこの人性といふ機構は一生涯殆ど變らないものであつて、縱令境遇の影響を受けることがあつても、その程度は固より言ふに足りない。人間の天稟その特徵ある性格は、いづれも生物學的性質のものであるから、決して變化しないものである。かゝる基本的な人性の構造が人間生活の日々の行爲や反應を決定する。人間は遺傳の產物である。これが遺傳說の要旨である。

環境說は、人間の性癖や能力の總計や一覽表などでは眞空のようなものであり、單なる抽象物であつて、何の意味もないものと主張する。人性は人間の現實の行爲や實際の物の見方を總計したものである。人間は本能の束ではない。人間は日々の行爲や彼の注意をひく利益や彼の頭を滿してゐる觀念の綜合體であつて、この綜合體は第一に環境に左右される。人間が固有の素質をもつてゐることは否めないが、しかし實際の行爲は、意識に入り込む外界の刺戟の性質、詰りその生活環境に依存する。外界の刺戟に對する人間の反應を彩る傾向は生得のもので靜止的のものであるが、反應その者は外界の刺戟に應じて種々に變化する。人間の性癖や能力を生かすのも殺すのも環境であり、思想を培養するのも亦環境である。遺傳力は不易であるが環境の壓力は可變的であつて、時間及び空間に依存する。人性を決定し、形成するものは環境であり、殊なる環境は異なる反應と觀念とを生み、異る人間を造る。環境說の言ふ所は大體このようである。

この二つの學說の中マルクス――エンゲルスが特に力說するのは環境說である。併し、人間に內在する遺傳的資質のもつ意義に就ては彼等も亦、これを認めてゐた。マルクス――エンゲルスは人間が生得の能力と性向を有することを認める。併し、其等のものは潛在的のものであつて、それが健全な發達を遂ぐるためには、活動と餘裕が必要である。人間は誰でも生れ乍ら或る程度の精神的素質を有つものであるが、これが、生育するか、否かは環境の利不利に懸つてゐる。マルクスは社會的分業や生產行程上の微細な分業が勞働者の先天的及び後天的能力に基くものであり、個人に對して各種の性向や才能に適應する職業を見出す機會を與へるものであると言ひ、同時にエンゲルスと共に分業が單一の筋肉的、精神的の作業を不斷に反覆修練する結果、すべての知識上、肉體上の能力を殺して、勞働者を畸形體に轉化してしまうものであると說いてゐる。（「資本論」第一卷、改造社版、三四一）

マルクス――エンゲルスは又是等の性向、能力が量に於ても質に於ても各個人によつて異なるものであることを充分知つてゐた。人間の天賦は肉體的にも精神的にも異なる。人間は生來、平等ではない（ゴータ綱領批評）。同一商品の生產に要する勞働時間は勞働者によつて必ずしも同一ではない。この差異が生ずるのは「一部分は體格や年齡の

如き純粋に物質的な性質によるのであり又一部分は忍耐の無感覺や勤勉の如き純粋に消極的、道德的な性質上の相違によるものである」（「哲學の貧困」マルクス――エンゲルス全集第三卷五〇六）分業は勞働者間の不平等に甚く。或る作業は他の作業よりも、多くの力と熟練と注意を要する。「同一の個人は總てこれらの性質を同一程度にもつものではない」（「資本論」第一卷）「財産はないが、精力と堅實さと實力と營業上の知識とをもつ人ならば資本家となることが出來る。これは恰も中世のカトリック教會が身分や門地や財産などに頓著なく、人民の優良分子を以てその教階制度を形成したのに等しい。」（「資本論」第三卷）或る人は生れ乍らに指導者であつた。オーエンはかゝる少數者の一人である。アリストテレスは「古代の最大の思想家であり」クセノフォンはその著作で既に「特徴あるブルジョワ的本能」を示してゐる。ジョン・ベラーズは凝り固つて經濟學史上の一奇觀ともいふべきものであつた（同前四七六）。「ワットは天才であつた。」「マンドヴィルは正直で頭腦の明晰な人であつた。」（「資本論」第一卷前出六〇五）「ヴェネチヤの僧オルテスは獨創的にして才氣湧くが如き作家であつた。」（同前六〇七）これ等の章句はいづれもマルクスが人間に生得天賦の能力や性向の有するのを認めたことを示すものである。ウイルヘルム・リープクネヒトが「マルクス追憶」の中で語る所によれば、マルクスは骨相學の信奉者であつて、懇意な友人の頭を誰彼となく仔細に檢べるのが常であつたと言ふ。これ等の事實はマルクスが人間には遺傳的な差違が存すると言ふことを認めてゐたことを明かに物語るものである。

マルクスは個人に就てのみならず、又人種に就ても先天的資質の有することを認めてゐた。彼は「革命及び反革命」の中で、ボヘミヤ人やクロアチヤ人が汎スラブ運動に加入してゲルマンの支配から自らを解放しようとする企圖に對して好意を示してゐない。彼はその際、明らかにドイツ民族の優秀を指摘し、「ゲルマン民族をば、その古くからの東方隣邦を抑へ、吸收し同化するだけの物質的、知識的實力を備ふる、より精力的な人種」に擬してゐる。（「革命及反革命」）エンゲルスも亦「ゲルマン人は勿論極めて優秀なアーリヤ人種である」と言つてゐる（「家族私有財産及國家の起源」）併し乍らマルクス――エンゲルスの眞意が個人や人種間の差違を專ら遺傳の力に歸しようとしたものでないことは勿論である。差違は勿論そこにあるが、しかし遺傳は最も重要な原因でもなければ、又支配的な原因でもない。この點に於てマルクスの見解はアダム・スミスに近い。マルクスは「哲學の貧困」の中でプルドンを駁するためにスミスの言葉を引用してゐる。「實際に於ては、個人間の自然的才能の差異は吾々の考へるより遙かに少いものである。成熟期に達した時、各種の職業に從事してゐる人間を差異あらしむると思はれる各種の性向は分業の原因といふよりも寧ろ分業の結果である。」原則として、人夫と哲學者との差異は番犬と獵犬との差異よりも少ない。兩者の間に淵を設けたのは分業である。（「哲學の貧困」前出五六五）

歴史上極めて重要なもので、マルクス――エンゲルスが明かに、先天的のものと考へてゐたのは、傳統に對する人間の執拗な愛著、言はゞ傳統的精神である。人間は概して極めて保守的なものであつて、壓迫を受けなければ中々變更をしない。物を深く研究したり調査したりしないで、一般に休息を求める。現在あるもの、殊に、久しい間存在してゐるものは、それ丈の充分な存在の理由あるも

のであるから、これを妨害してはならぬ。人間は重大な改革のために戰ふ場合でも、そのスローガンやモットーを過去から求め、事件に榮譽と威嚴を添へるために兎角過去の功業を結び付けたがるものである。「あらゆる過ぎ去つた時代の傳統は活きてゐるものの頭腦の上にアルプスのようにのしかゝる。人間は革命的危機の時期に於てさへも、その御用を勤めさせるために、過去の靈魂を呼び起し、その名前とその関の聲とその衣裳とを借りようと腐心するものである。ルーテルは使徒ポーロに扮裝し、一七八九――一八一四年の革命はローマ共和國とローマ帝國との衣裳を代はる代はる身に着け、一八四八年の革命は、或る時には一七八九年の、或る時は一七九三――九五年の革命的傳統を燒き直すこと以上には何一つ出ることが出來なかつた。」（「ルイ・ボナルトのブルュメール十八日」）古いものが人間をがつしりと掴んでゐて、進歩は歩みが遲いものである。時代遲れとなつた體のいろ〳〵な要素が長い間新しい組織にこびり付いて離れないのは傳統と慣習の爲めである。「傳統は偉大なる制止力であり、歴史の惰力である。」（「空想より科學へ」）

二

人間の最も强力な衝動として古來、常に問題とされてゐるものに利己心がある。マルクスは利己心をば「人間の心の最も激しい、野卑にして、最も意地の悪い情念、私的利益のフーリー神である」と言つてゐる。（「資本論」第一卷）利己心が實現される場合には人間の最も野卑な情念が姿を現はす。資本は利潤の誘惑の前に盲目となる。利潤の色香に迷ふ資本は遂に犯罪をも敢て辭せぬ。マルクスはピー・ジェー・ダニングの著「勞働組合と罷業」から次のような一節を援用して自說に代へてゐる。

「自然は眞空を怖れるといはれてゐたが、恰度それと同樣に、資本は利潤なき所を怖れるのである。適當な利潤があれば、資本は極めて大膽である。一割の利潤が確實であれば資本は何處に於ても充用され得べく、二割の利潤があれば活潑となり、五割の利潤があれば積極的に大膽となり、十割の利潤があれば、人間の定めた一切の法律を蹂躙し、三十割の利潤があれば、如何なる犯罪をも顧慮せず、所有者が死刑に處せられる危險をも辭しないのである。若し混亂と紛擾とが利潤をもたらすとすれば、資本は自由にこの兩者を奬勵するであらう。密輸出入と奴隷貿易とは玆に述ぶる所を十分に證明せるものである。」（「資本論」第一卷）

利己心は人間の多くの苦惱の原因ではあるが、しかし又社會の進歩と變化の槓桿でもある。人類の歴史上に於て、この利己心の「被害」を免かれた時代がたつた一つある。マルクス――エングルスの言ふ所によればそれは氏族社會の時代である。

氏族社會には利己心は知られてなかつた。平和で、淳朴な、牧歌的な社會であつた。この社會の崩壞と共に地上は絶えざる混亂の舞臺と化した。利己心が姿を現はしたからである。「無恥な貪慾が文明の夜明けから今日に至るまでその主動精神となり、一にも富、二にも富、第三にも富、その富は社會の富ではなくして、ちつぽけな個人の富がその唯一、最後の目標となつた。富に對する欲望が氏族成員を富者と貧者とに分裂させた。中世に於ては高利貸

資本と商人資本とが支配的形態であり、商人資本は到る處に盜掠の一制度を代表し、而もこの資本の發達は暴力的な盜掠即ち海上盜掠や、奴隷掠奪や、植民地征服などと直接に結びついてゐた。」（「資本論」第三卷）

資本主義の出現は利己心の活動に一段の拍車をかけた。資本主義成立の序曲となつた所謂資本の本來的の蓄積なるものは、血と火の文字で書かれ、窃盜と暴行と民衆の窮乏の連續によつて特徴付けられ、殺人と盜掠と戰爭の一大繪圖である。「資本は頭の天邊から足の爪尖に至るすべての毛孔から血と汚物とを滴らしつゝこの世に來つたものである。」（「資本論」第一卷）資本主義の核心は赤裸々な利己心である。「ブルジョワジイは一切の封建的、家長的、牧歌的關係を破壞してしまつた。人をその生れながらの目上と結びつけてゐた封建的の色彩を無殘にもひきちぎつてしまつて、人と人との間には唯、赤裸々な利害、冷酷な現金勘定より外に何らの關係をも殘さなかつた。宗教的の熱情や武士的の感激や町人的の人情などといふ神聖な渴仰心を、氷のように冷たい利己的な打算の水の中に溺れさせてしまつた。人間の價値を交換價値の中に消へ去らし、永く確保された無數の特許的自由の代りに、たつた一つの無茶な商業的自由を設立した。これを一言にして云へば、ブルジョワジイは宗教的、政治的幻影を以て蔽はれた搾取の代りに、公然たる、無恥の、直接な、露骨な搾取をつくり上げたのである。」（「共產黨宣言」）「富に對する貪慾が頭を擡げる。商品流通が擴大されるにつれて、いつでも利用し得べき絶對的に社會的の形態をとつた富の力、換言すれば貨幣の力が增大してくる。」「金は不思議な物だ。それを所有する人は望み次第に如何なる物の支配者ともなる。金さへあれば魂を天國に達せしめることすら不可能ではないのである。」「一切のものは貨幣に轉化される。一切の物は賣買され得るものとなる。流通は一切の物を收容し、これを貨幣結晶として放出するところの一大社會的レトルトとなる。この鍊金術には聖徒の骨でさへ逆らうことができないのであるから、況して商業取引の手の屆かないより微妙な聖物に於ては尙更のことである。」（「資本論」第一卷一〇一）資本主義の發展と共に全世界は一大商品市場となる。「商品はそれ自身、宗教的、政治的、國民的、言語的障壁を超越する。その世界的言語は價値であり、その共同體は貨幣である。國民性なるものは「ギニヤ金貨のスタンプ」にすぎない。資本家の頭に浮ぶ全世界なるものの崇高な觀念は、市場の觀念であり、世界市場の觀念である。」（「經濟學批判」全集第七卷五三五）かゝる利己心の跳梁は唯、社會主義の到來を俟つて始て其の姿を消す。社會主義と云ふ新秩序は利己心を活動せしむる總ての刺戟を取去つてしまうからである。

三

マルクスが歷史上に於ける利己心の活動と意義とを強調してゐるあたりは、イギリス古典派經濟學の所謂「經濟人」を髣髴させるものがある。併し兩者の行論に大きな相違の存することを看逃してはならぬ。古典派經濟學の說く所によれば、人間は利己心の考量に依つて導かれる。しかし、それは人間活動の全領域を通じてではなく、その一定の限られた範圍即ち經濟的取引の範圍內だけのことである。スミス、リカルド、ジェー・エス・ミル等は人間がそのすべての生活部面を通じて利己心に左右されるものであるとは主張しない。彼等は又政治、法律、倫理、宗

教、藝術及科學を通じて、最も重要な人間の性向が利己心であるなどと主張したためしはない。アダム・スミスは「道德情操論」の中で、利己心を以て社會生活並に歴史的進歩の決定要素を看做した一切の見解に痛烈な批判を加へて、社會の原動力は利己心でなく、却て同情であると說いてゐる。ジェー・エス・ミルも亦私利若くは名利が政治の唯一の支配原則であることを主張する哲學者に懸命に反對する。凡そ社會現象は單一の人間性向だけでは說明することはできない。「一切の決定要素」を愼重に研究してかゝらねばならない。「社會現象は人間性向の或る單一の要素に左右されるものではない。人性の總ての資質がこれ等の現象に影響を與へる。少ししか影響しないと云ふ要素はない。」古典派經濟學者は「經濟人」を想定し、マキヤヴェリは政治領域に於て「政治人」を假定したが、マルクス――エンゲルスは更に竿頭一歩を進めて、人間は社會生活並に文化の一切の部面を通じて、利己心に支配されるものであると說く。彼等によれば、人間はプロレタリヤを除いて利己心の理想的權化であつたし又今日依然として、そうである。

マルクス――エンゲルスが、この利己心を人性の先天的性質と考へてゐたか、或は單に環境の產物と考へてゐたかどうか、この點は餘り明白ではないが、彼等の片言雙句を綜合すると、彼等の眞意は遺傳說にあつたように思はれる。エンゲルスは文明の業績を稱へると共に、利己心の本能がその背後の原動力であつた事實を歎じてゐる。謂へらく「此等の業績は人間の最も卑しむべき情念と本能とに働きかけ、爾餘の天禀を犧牲としてこれらを發達させることによつて成し遂げられたものである。原始氏族社會に於て、明白な平和條約のないところでは、戰爭が種族同志の間で戰慄すべき殘忍さを以て行はれたが、この殘忍さは、漸く後に至つて利己心に依て緩和せられた。」（「家族私有財產及國家の起原」）この氏族社會の解體並に階級の導入に當つて利己心は極めて重要な役割を演じた。「新しい階級社會は、最も卑しい衝動卽ち卑俗な貪慾、獸的な快樂、汚らはしい强慾、共有財產に對する利己的盜掠に依て開始された。階級なき古氏族社會は最も賤しむべき手段卽ち窃盜、暴行、詐欺反逆に依つて傾き、そして沒落するに至つた。」（前揭書）どうして、このような賤しい性向が人間の心の中に棲家を見付けたのであらうか。こゝに疑問が起る。氏族社會がこれを生み出す筈はない。氏族社會は自由と平等とが行はれる淳朴調和の社會である。エングルスは謂つてゐる。「この氏族制度は何といふ天眞爛漫さと淳朴さとをもつた不思議な制度であらう。兵隊も、憲兵も警官もなく、貴族も國王も、總督も知事も或は裁判官もなく、監獄もなく、訴訟もなくして、而も萬事が圓滑に行はれる。……貧民や窮民はあり得ない。すべての者は平等にして自由である。……これが種々の階級への分裂が行はるゝまでの人類及人類社會の狀態であつた。」（前揭書）原始氏族社會では利己心が活動する餘地がない。利己心は姿を隱してゐたのである。分業の發生、交換の發達と共に富への欲望が起り、ここに人性に潛在する利己心が頭を擡げ出す。マルクス――エンゲルスは利己心を遺傳的な人間性と考へてゐたもののようである。共產主義の行はれた原始氏族社會ではこの性向が遂に頭を擡げる機會がなかつたのである。反面から云へば、氏族社會は利己心を必要としなかつた。利己心の發生に口實を與へなかつたのである。氏族社會に繼ぐ文明社會に至つて、久しく人體內に眠つてゐた利己心の惡魔はやをら眠を覺して活動を始めるが、資本主義に至て愈々猛威を逞しうする。併し社

會主義の到來と共に利己心は人心の中に新に咲き亂れる諸々の高貴なる動機のために十重二十重と抑へ付けられ、又頭を擡げる刺戟もないので再び人心の內奥に眠り込んでしまう。マルクス――エンゲルスはこのように考へてゐたようである。

プラトン及びアリストテレス以來思想家は一般的に人性に就て悲觀的見解を抱いてゐる。ゴドウィン、ルソー、コンドルセーの如き人達は例外である。是等の人々は、人間性は現存の環境の下では惡いが、社會狀態さへ善くなれば、どこまでも完成すると考へてゐた。マルクス――エンゲルスはこれ等の樂觀論者に屬するようであるが必ずしもそうではない。エンゲルスがヘーゲルの「人間はその性善なりと言ふ時、人々は何か非常に偉大なことを言つたようにでも思つてゐる。けれども、人間はその性惡なりと言つた時は、もつと偉大なことを言つてゐるのだと言ふことが忘れられてゐる。」と言ふ言葉を贊意を以て援用してゐる所から推測すると、マルクス――エンゲルスの眞意はどうやら性惡說にあるもののようである。

勿論マルクスもエンゲルスも、人間には利己心以外に高尙な性向をもつてゐるものだと言ふことは充分認めてゐた。エンゲルスは人間には、性愛、友情、同情、自己犧牲と言ふような相互的感情が存在して居り、又人間が名譽心、眞理や正義に對する熱情など、種々の理想的動機に依て屢々動かされることを認める。併し、これ等の麗はしい性向は寧ろ卑近な日常生活の關係に現はれる私的な德性と見るべきものであつて、大きく、歷史の過程や社會の進化の上に影響しないものである。歷史や社會の發達上では、これ等の性向の役割は周邊的なものであつて、決して中心的ではない。歷史の舞臺の上で、主役を演ずるものは利己心である。マルクス――エンゲルスはかように考へてゐたようである。

四

人間の性向は單に遺傳の見地からだけでは充分にこれを捉へることは出來ない。更に環境との關聯からこれを理解しなければならない。マルクス――エンゲルスによれば、「人間の本質は社會的諸關係の總體である。（「フォイエルバッハ論」）從て人間性を充分に把握するには、「人間を、その社會的關聯に於て、彼等が現に在る所のものに彼等をなした所の現在の生活條件のもとに於て」（「ドイツ・イデオロギー」）考察しなければならぬ。人間には生得の才能や深い個人差や格別の特長と言ふものがあるが、これ等の事項を唯、合計しただけでは現實の人間性を充分に理解することは出來ぬ。眞實の人間性は一定の環境に對する現實の生きた人間の反作用と應答との總計、換言すれば一定の時代と場所から生れた特定の觀念、感情、偏見、經驗目的等の合計である。人間をその生活環境から引離して、單に人間の裡に內在する潛在的力や傾向を擧げただけでは、眞實の人間性を捉へることは出來ない。人間の性向は出生の時に與へられた一定、不變の裝置の儘ではない。それは可變的のもので、不斷に形成され、外界からの刺戟の下に種々大きな變化を受けつゝあるものである。從て人間は世界を通じ、歷史的時代を通じて決して同一ではない。「全歷史は人性の不斷の變化に外ならぬ。」（「哲學の貧困」前出五七八）人間の凡ゆる行爲、運動關係等を批評しよ

らとすれば、先づ人間性一般を研究し、次に各時代に於て歴史的に變更された人間性を研究する必要がある。」（「資本論」第一卷、前出五九八）人間は環境の産物と言はなくてはならぬ。

一般に環境と言つても、その中には、人間社會を圍繞する自然的條件の總稱たる自然的環境と、これに對立する社會關係の總稱たる社會的環境とがある。人間に依て變改されない風土的宇宙的條件、例へば、氣候、風土、地質地形等は前者に屬し、民習、制度、政治、經濟、文化、言語、宗教等は後者に屬する。自然的環境、社會的環境が共に人性の形成の上に深い關係をもつものであることは既に多くの人々によつて指摘された所であつて、茲に、事新しく言ふ要はないが、問題はこれ等の要素が人性の形成の上に演する夫々の役割である。

自然的環境が人間や社會に決定的影響を與へるものであることは夙にイブン・カルダン、ジャン・ボーダン、モンテスキュー、ヘルデル、リッター、ラッツェル、バックル等に依て多かれ少なかれ論ぜられてゐる。こゝでは、これ等のことを問題としない。之に反して、マルクス――エンゲルスは自然的環境の影響には餘り注意を拂つてゐない。自然的環境が生産方法に及ぼす效果を通じて有つ間接的影響に就ては、彼等は、これを充分承認し、力說するのを常としたが、その直接的影響に就ては殆ど論じなかつた。「家族、國家及び私有財産の起源」の中でエンゲルスは次のような事を言つてゐる。「アーリヤ人やセム人の間に於ける豐かな肉や乳の食物及び殊に子供の發育に及ぼしたそれらの好影響は恐らくこの兩人種の優秀な發達の原因であらう。實際殆ど純植物性食物のみを取るニュー・メキシコの部落インディアンは野蠻の下期にあるところのヨリ多くの肉及び魚を食ふインディアンよりも小さい腦髓をもつてゐる。」（「マルクス・エンゲルス全集」第十二卷六九二）マルクスも亦「資本論」で「絶對的並に相對的餘剩價値」を論ずる際に、この問題に言及して、自然の恩澤豐かな處では兎角人間は遊惰安逸に流れて、獨立自營の氣魄に乏しいが、これに反して天惠の薄い所では、却て人間を奮起努力せしめ、諸種の事業を創意工夫するに至らしむるものであると說いてゐる。（「資本論」第一卷、前出四九八―四九九）

マルクス――エンゲルスが人性の形成の上に於いて最も重要視するものは社會的環境の要素である。これは唯物史觀の立場に立つ彼等として蓋し當然の結論であらう。「人間は、全く文字通りの意味に於て、社會的動物である。啻に社會的動物であるばかりでなく、社會内に於て一個人にまで發展し得る動物である。」（「經濟學批判」全集第七卷三八五）人間は社會的環境から作り出された空氣を吸ひ、その傳統を吸收し、その物の見方を同化する。彼の性格はこの過程の中に形成される。人間は社會を必要とする。自然に働きかける前には必ず、先づ社會に居なければならぬ。社會や數多の制度や慣習から遊離した人間は單なる幻影にすぎぬ。人性は社會によつて培養され、形ち造られるものであつて、何れの時代に於ても一定の社會組織の特徴の縮圖、反映であり、社會生活の本質を構成する無數の要素の理想的沈澱物である。「人間の本質は各個人の中に内在するところの抽象物ではない。それは現實に於て社會關係の總和である。」（「ドイツ・イデオロギー」岩波文庫版、三三）如何なる社會でも、人間の潜勢力を一定の型に鑄込み、その時代特有の思想や、感情を吹込むことに依つて、人性を鑄造する。かくて原始氏族社會は恐れを知らない、愛他的な、そして自由を愛好する個人を作り出す。ゲルマン人がローマ帝國に勝つて、瀕死のヨーロッパに

新しい生命力を注入し、その廢墟の上に新しい歴史を築くことが出來たのは、何故かと言へば、それは排外主義的史家が主張するように、決してゲルマン人種國有の魔力の結果ではなく、彼等の生活してゐた氏族社會の賜物である。成程、當時ゲルマン人は優秀な一アーリヤン人種に相違なかつた。併し、ヨーロッパを若返らしたのは、彼等固有の國民性ではなくして、彼等の氏族制度であつたのである。（「家族、私有財産及國家の起源」全集、第十二卷八〇〇）十八世紀の個人は、一面では封建的社會形態の崩壞の産物である、他面では、十六世紀以來新らしく發展して來た諸生産力の産物である。」（「經濟學批判」全集第七卷三八四）かように人性は社會の産物である。從つて社會的環境が變化すれば、當然それに伴れて人性も亦變化する。現在の人性を以て、社會主義實現の不可能を推すことは理不盡である。現在の人性は資本主義社會の産物であつて、資本主義の滅亡と共に必然墓場に葬らるべき運命のものである。社會主義は社會を變更する。社會の不可避的産物である人性も亦新しい社會の到來と共に一新する。マルクス――エンゲルスはかように說くのである。

玆に注意しなければならない事は人性の形成に直接決定的影響を與へるものとしての社會と言ふ概念の意味である。人性が直接影響を受取る社會の實體とはどんなものであらうか。

マルクスによれば、社會はそれ自身獨立せる實在ではなく、生産方法の結果であつて、この生産方法が社會に特殊の性格を與へ、そして社會制度を決定する。從つて、人間に對する社會の影響に關するマルクスの見解を論ずる場合には、生産方法は社會の隱れたる根本的力であつて、社會を特徵付け、人性に働きかける諸要素を放出するものは、實にこの生産方法であることを知らなければならない。

人間は社會の産物であり、社會から種々の影響を受取るものであるが、マルクスに依れば總て社會は階級的に構成されてゐるものであるから、人間が先づ直接の影響を受取る源泉は自己の所屬する特定の階級であると見なければならぬ。されば人間は社會の産物であると言ふ意味は、嚴格に言へば人間は階級の産物であるといふことである。自己の所屬する階級以外からは何等の影響を受けないのかと言へば、無論自己の階級外からも受くるものと見なければならぬ。個人の一般的見地や慣習の如きはこれであらう。しかし個人の特殊の性向の如きは專らその所屬する階級によつて決定される。個人の思想、利害、目的、態度、處世術等はいづれも彼が所屬階級のものである。マルクスは「資本論」第一卷序文の中で、自分が資本家や地主を暴露してゐるのは決して個人に責を負はせようとするものでないと言明してゐる。（「資本論」第一卷序文）何となれば個々の資本家や地主は經濟的範疇を人格化した者であり、又特殊の階級關係階級利害の擔ひ手にすぎないからだと述べてゐる。生産方法、それが造り出した社會形態、社會制度、階級――これがマルクスが人間の性向の形成の上に影響を與へる社會的環境を構成するものである。

マルクス――エンゲルスは又一般に勞働、殊に職業が人性並に知的水準の形成の上に大きな勢力をもつものであることを力說してゐる。「勞働は先づ人類と自然との間に於ける一行程、換言すれば人類が彼自身の行爲に依つて自然との間に於ける代謝機能を媒介し、調節し、管理する所の一行程である。人類は一の自然力として、自然素材そのものに對立する。人類は自然素材をば彼自身の生活に使用し得べき形で占有せんが爲め、彼自らの身體に屬して

ゐる諸種の自然力なる腕や脚や頭や手を運轉させる。彼はこの運動に依つて、彼自身の外部に於ける自然に作用してこれを變化せしめ、斯くすることに依つて又彼自身の天性を變化する。彼は彼自身の天性の裡に眠つてゐる諸種の潜在力を展開して、彼自身の天性の諸力の活動を彼自身の支配の下に置くのである。」（「資本論」第一卷前出一四九）勞働は人間の生涯の大部分を要求する。人間は勞働に對して自己の精力と能力の大部分を傾ける。勞働は人間の行爲と直接經驗の小世界の殆ど全部を構成する。それ故に人間の勞働の分野が廣いか、狹いか、單調であるか、刺戟に富むか、單純であるか、複雜であるか否かによつて、人間の天性の潜在力も亦或は發達し或は沮止される。哲學者と人夫との差違は主として職業的分業の結果である。（「哲學の貧困」前出五六五）細部を完成する餘り知的能力の世界を殺すのは工場に於ける分業の結果である。農業勞働者の充分なる發達を拒むものは農村の鈍重、單調なる勞働である。「ドイツのプチ・ブルジョワジイは臆病で優柔不斷である。その商業取引や信用取引のけち臭い性質が彼等の性格に精力と冒險心の缺如を銘印するに最も適はしいものである。」（「革命及反革命」全集第五卷三一〇）勞働の變化のみが人間の能力と性格の多方面の發展をもたらすものである。エンゲルスは社會主義社會に於ける勞働の變化に深甚なる關心を示し、これがすべての社會構成員をして、彼等の能力を出來るだけ全面的に育成し、保存し、且つ發揮することを得しむる。」（「反デューリング論」前出第十二卷三七二）ものであると說いてゐる。

五

以上述べた所に依つて、人性に關するマルクス――エンゲルスの見解は大體盡きてゐると思ふ。人間は恰度風見のようなものである。人間の意識に上る數多の環境的刺戟が人間の反作用や行爲方法を生み、彼に觀念と空想を與へ彼の性格を決定する。無論、人間は生得遺傳の性向や素質を有つ。併し、これ等のものは風見の材料のほんの一部分にすぎない。是等の先天的遺傳的性向は、人間を彼等の意圖通りに環境を支配し變更することを得しむる獨立の意志ある動物たらしむるものではない。又自由に行爲の道を選擇せしむるものではない。人間は環境と言ふ風に對して受動的で、自動力なく、言はゞ羽毛のようなもので、外界からのあらゆる刺戟に仕ふる召使の如きものである。

マルクス――エンゲルスは先天的遺傳的人性の存立と意義を無視するものではない。併し、それは、人間が環境から後天的に、經驗的に獲得した性向に比すれば左して問題とするに足りない。之に反して、彼等が人性に對する環境の意義を認むることは絶大である。マルクスが「フォイエルバハに關するテーゼ」の中で「環境と教育との變化に關する唯物論的學說は、環境が人間によつて變化され、又教育者自身が教育されねばならぬと云ふことを忘れてゐる。」（「マルクス・エンゲルス全集」第十五卷三一三）と述べてゐる一節は、マルクス――エンゲルスを環境論者と看做すことの不當を證する有力なる論據として、好んで援用されてゐるものであるが、これこそ樹を見て森を見ざる」知半解の解釋である。この一節は、彼等が環境論者たることを斷じて妨ぐるものではないどころか、寧ろ彼等の意圖は、これに依て從來の環境論の不備を補完せんとするにあつたのである。從來の唯物論の缺點は環境が人間

に依で變化されると言ふ事實を閑却し、教育者自身が教育されなければならぬ事を看過した所にあると言ふ。然らば人間は如何にして環境を變化するや。人間は自分勝手に自己の意志に基いて、環境を變へ、歴史を創造し得るものであるか。マルクス――エンゲルスは、歴史に於ける人間の意志の自由、及び自發性を強調したのであるか。斷じて然らず。マルクスの前記の一節から、若しかような結論をひき出さんとする者があれば、それは愚か千萬なことである。然らばマルクスの眞意は何處にあつたか。マルクス自身をして答へしめよう。彼が「ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日」（一八五一年）の冒頭に書いた左の一節は人のよく知つてゐる所である。「人間は自己の歴史を造る。けれども彼等は自分勝手に、自ら撰擇した事情の下に歴史を造るのではなくて、直接目前に與へられた一定の、過去から手渡された事情の下にこれを造るのである。」（「マルクス―エンゲルス全集」第五卷一二九）此の一節でこの間の疑念は解けたことと思ふ。確かに、環境は人間に依て變へられる。人間が環境を變へることは些の疑がない。人間が環境を變へ得ればこそ一切の社會改造の努力はその意味があるのだ。併し、この人間の環境變化力は又それ自體自主的のものではなく、環境に依て決定される。環境が人間の歴史創造力を強く限定してゐる。こゝに又環境の力が最後的の締め括りをする。マルクスは傳來の環境論を否認しようとしたものでなく、よくその長所と共に短所を認めて、これを擴充しようとしたのである。マルクスは從來の唯物論的學説の弱點をよく認識してゐた。即ち教育者の問題である。從來の環境論者は教育者に自主性を與へてゐた。教育者自身が教育されねばならない事實に深く思ひを致してゐない。教育者も其自身環境の産物である。無制限に振舞ふことを許されない。與へられた事情がその自由行動に鐵の制肘を加へる。人間は「生れるとすぐ、世界は影響し始める。」（「ゲーテ」）その世界、その社會は、人間の意志から、獨立せる、一定の必然的な關係に外ならぬ。人を教育し、感化する教育者に自由意志はない。マルクスはこの「テーゼ」に依て傳來の環境論に尙ほ存立する自主性の最後の殘滓を衝き、教育者の自主的影響を絶滅しようとしたのである。かくて人間は、盲目的に作用する自然過程に於ける一の盲目的に作用する手段となつた。革命的實踐は人間を自然法則的過程に於ける他の一切の要素と同價値の要素に引下ろした。マルクスの見る所に依れば、人間は、言はば、一つの環境、一つの外的事情となるわけである。マルクスは、資本論第一版序文で、この間の消息を明確に裏書きしてゐる。曰く「私は、社會の經濟的形態の發達を一つの自然史的過程と解するものであつて、この立場からすれば、個々の人間は主觀的には如何に四圍の事情に超越してゐるとしても、社會的には、依然として、その被造者たるを失はないのである。そこで私の立場は、他の總ての人々の立場に比して、個々の人間をして、四圍の事情に對して責を負はしめ得ることが最も少ないものとなる譯である」（「資本論」第一卷前出七）四圍の事情、即ち環境の如何は人間の責任ではない。人間の關知せざる所、そして人間は主觀的には、どう考へようとも社會的には所詮、環境の被造物、即ち産物である。彼の環境信念が如何に深いものであるかは、徹底的な環境理論家たるダーウィンに對する彼の傾倒の程からも亦窺はれる。ダーウィンの「種の起源」（一八五九年）が出版さるや、彼は讀後の所感をエンゲルスに書き送つて言ふ。「この書物は僕等の見解に對する自然史的基礎を含むものである。」（「マルクス・エンゲルス全集」第十八卷三八五）と。マルクス――エンゲルスが徹底的な環境論

者であることは今や疑を容れない所である。

然らば、マルクス――エンゲルスの環境論は、彼等以前のそれと全く同一のものであるか。相異點はないか。

六

環境說はイギリス感覺論の子である。十七世紀末に發達した自然主義的社會觀は感覺論的形而上學と結び付いて、個人の形成に對する外的事情の影響を過大に强調する結果となつた。その先蹤はボーリングブロークである。十八世紀のイギリス社會學者は殆ど何れも環境說を說いてゐる。この環境說は啓蒙時代のフランス社會哲學者達の中に特に熱心な共鳴者を見出した。ヴォルテール、コンディアック、ド・ラメトリイ、オルバッハ、エルヴェシュース、サン・ランベール等は特にロックに流を汲む環境說の支持者であつた。一切の責任を個人に負はせず、專ら外的事情に負はせんとする此の環境論は、近代社會主義の社會變革努力に好個の論理的端緒を與へるものであることは言ふ迄もない所であるが、この環境論は、いづれも、前に述べた十八世紀のイギリス社會哲學者やフランスの啓蒙哲學者から藉りて來たものである。

近代社會主義者の中で環環論の立場を明確に表明した最初の人は「自然法典」（一七五五年）の著者ニコラ・モレリーである。彼はこの世界の一切の禍惡を社會秩序の缺陷に歸した最初の社會主義者である。それ以來ウィリヤム・ゴドウィン、ロバート・オーエン、サン・シモン、フーリエ、プルードン、ルイ・ブラン等何れも根本に於て、環境論を說かないものはないと言つていゝ。そして、マルクス――エンゲルスも亦同樣である。

人類の不幸の原因が人間自體の性向に內在するものとすれば、社會改造に依て人類の幸福をもたらさんとする一切の努力は全く無意味であると言はなくてはならぬ。社會主義は、社會變革に依て、人類が自由、幸福を達成し得るものと確信し、その實現に努力するものであるから、當然その論理的前提として環境說を取るものであることは明かである。環境說は近世に於て、十七世紀イギリスの感覺哲學に發芽し、同世紀終りの自然主義的社會觀に依つて育成され、十八世紀のフランス唯物論に於いて大成された。マルクスはフランス唯物論と社會主義との間に內的必然的關聯の有することを說き、近代社會主義を唯物論の論理的歸結であると考へた。（「神聖家族」全集第一卷）事實、近代社會主義にして、環境論の上に立たないものはないと言つていゝ。唯、マルクスが彼以前の社會主義者と異なる要點は、社會環境變革に對する人間の力に一定の限界のあること、そして、この限界を與ふるものが、社會の生產力であると言ふことを明示したことである。特定の社會組織が人類に不幸をもたらしつゝあるとしても、これを任意に改廢することは許されない。社會進化の理法がこれを鐵の必然性を以て制約する。「一つの社會はすべての生產力が、その中で餘地ある限り發達してしまはない間は決して滅びるものではなく、新なる社會は、その物質的生存條件が舊社會の胎內に育成しないうちには、決して現はれるものではない。」（「經濟學批判」全集第七卷）玆に唯物史觀の立場がある。人間の社會改造力には常に自然法則的な限界が存在する。この點にマルクスと彼以前の社會主義者との根本差が存する。環境は人間に依て變化される。人間の力で環境を變化し得ると確信すればこそ、社

會主義の努力は意味を有つ。この點マルクスを含めて、一切の社會主義者は同軌である。マルクス以前の社會主義者は多くは社會進化の理法と遊離して人間の環境變化力を見ようとする。マルクスは從來の意味に於ける環境論者ではないが、環境論その者を否定するものではなく、却てこれを擴充し、補完しようとするものであると言はねばならない。

（一九四六・八・一五）

資料

北歐學派利子論の分析

鈴木諒一

序論

動態經濟の把握に於て、貨幣的經濟理論が頗る大なる意義を有し、動態經濟理論の主軸をなして居ることは、周知の事實である。ローザンヌ學派流の所謂靜的一般均衡理論は、資本としての貨幣の作用を極度に抽象せる爲、理論が精密を極めれば極める程、現實から遠ざかると云ふヂレンマに陷つたのであるが、斯る分析は、果して、現實把握の手段として無用なる机上の空論に過ぎないであらうか。貨幣理論は、斷じて一般經濟理論と遊離せる單獨の貨幣理論としては、現實を把握し得ざることは明かである。併し、一般經濟理論と結合すると云つても、從來のまゝの靜態經濟學と其の儘の形で融合しても、不十分なることも亦明らかである。此處に於て、多くの「動態均衡」の構想が組立てられ、如何にして、現實への接近を試みんとするか